

仏教系教育機関のキリスト教社会への適応における学校組織文化の機能 ーハワイにおける浄土真宗本願寺派高等学校の事例をめぐってー

本 多 千 恵

The Functions of School Organizational Culture in the Adaptation of Buddhist Educational Institution in the Christian Society: The Case of Jodo Shinshu Buddhist High School in Hawaii

Chie Honda

【キーワード】 学校組織文化 仏教 平和教育 機能 適応

1. はじめに

ハワイ浄土真宗本派本願寺（以下、ハワイ本願寺と記す）は、2003年に西欧文化圏で初めての仏教系高等学校、Pacific Buddhist Academy（以下、PBAと記す）を創設した¹。アメリカの地で小学校から高等学校までの一貫した教育体制を確立することは、戦前のハワイ本願寺の布教を牽引した今村恵猛（第二代開教総長）の長年の夢であった。今村は教育宗教並進主義を掲げて教育を重視し、仏教を基盤とした平和主義を提唱した。PBAはこの「仏教的平和主義」を基本的に継承しながら、戦前から戦後への歴史社会的環境の大きな変化に応じた「平和教育」をおこなっている（本多 2022: 243-253）。

これまでの研究では、仏教系教育組織は布教との関連で捉えられ、それ自体がもつ組織文化の特徴や機能が十分に論じられていない。そこで、本論ではシャイン（Schein 2010）の組織文化論を手がかりとし、ハワイ本願寺附属高等学校（PBA）に焦点を当て、その教育組織文化がどのような特徴をもっているのか、また、組織としての適応においてどのように機能しているのかについて考究する。

シャインは組織文化を「グループが外部への適応、さらに内部の統合化の問題に取り組む過程で、グループによって学習された、共有される基本的な前提認識のパターン」（Schein 2010＝2017: 21）として捉えている。そして、「文化的現象が観察者に見える程度」の観点から、組織文化を3つのレベルー「人工物」、「信奉された信条と価値観（以下、信条・価値観と記す）」、「基本的な深いところに保たれている前提認識（以下、前提認識と記す）」ーに分類している（Schein 2010＝2017: 28）。ここでは、「学校組織文化」を学校という「組織の成員に共有されている固有のシンボルや意味の体系であり、認知、思考、行動の原理、およびこれらの前提となるもの」（本多2024: 123）と捉え、シャインの示した3つのレベルから考察する。

2. PBAの生徒のエスニシティと宗教

PBA（定員数92人）の生徒数（9学年から12学年まで）は、2006-7年には62人、2007-8年には56人、2008-9年には65人（PBA 2009: 178）、2010-11年には64人、2012-13年には50人、2014-15

年には66人、2015-16年には68人（PBA 2016: 103）、2021-2022年には80人（PBA 2023: 137）、2022-2023年には74人（PBA 2023: 5）となっている。

PBAは小規模な教育体制の仏教系高等学校であるが、多様な文化的バックグラウンドを持つ生徒が学んでいる（PBA 2009: iv-v, 2016: 94, 2023: 5-6）。エスニシティについては、インターマリッジが進んでいるハワイ社会の状況を反映して、複数のエスニシティをあげる生徒も多い。日系のバックグラウンドをあげる者が最も多く、沖縄系は日系とは別の一つのエスニシティとして捉えられている。2016年と2023年を比較すると、中国系、非ヒスパニック系白人が大きく増加しており、多文化化が進んでいることが読み取れる。

表1 エスニック・バックグラウンド

年	2009	2016	2023
エスニシティ			
アジア系	89.06%	日系 67.9% 沖縄系 25.0% 中国系 21.4%	日系 64.06% 沖縄系 21.88% 中国系 39.06%
フィリピン系	12.5%	7.1%	15.63%
ラテン・ヒスパニック系	12.5%	21.4%	28.6%
スペイン、イタリア、ギリシア系	—	12.5%	18.5%
非ヒスパニック系白人	25.00%	21.4%	45.31%
太平洋諸島出身者	15.63%	ハワイ系 10.7%	ハワイ系 17.19%

宗教については、仏教徒が最も多いが、2016年から2023年にかけて、10%近く減少している（PBA 2009: iv, 2016: 10, 2023: 7）。キリスト教も2009年には30%以上を占めていたが、2016年、2023年には約半数に減少している。これに対して、宗教を持たない者（無宗教、不可知論、無神論）は、2009年に33.33%、2016年に46.4%、2023年には53.14%に増加している。この結果は、アメリカ社会における宗教の衰退を示唆している。

表2 宗教的バックグラウンド

年	2009	2016	2023
宗教			
仏教	37.04%	37.5%	28.13%
キリスト教	33.33%	16.1%	17.19%
無宗教	33.33%	16.1%	28.13%
不可知論	—	17.8%	9.38%
無神論	—	12.5%	15.63%

3. PBAの学校組織文化

ここでは、前述したシャインの組織文化の3つのレベルの観点から、PBAの学校組織文化を考察する。

3.1 人工物

人工物は最も表層レベルで可視的であるため、外的集団との相互作用、シャインのいう「外部への適応」において重要な意味を持つ。PBAの人工物には、その教育理念である平和主義と仏教的価値の具現化がみられる。校名、校章、スクール・カラー、校内に設置された阿弥陀仏、教育カリキュラム、学校活動、行事等があげられる。さらに、広義には、学校の信条・価値観に基

づいた行動パターンも含まれる。

Pacific Buddhist Academyという校名は、“Pacific”²が「学校の平和へのコミットメント」、
“Buddhist”は「学校が道徳的市民を育成するアプローチ」、
“Academy”は「学校のビジョンを実現するために必要で十分な学習環境」を意味している（PBA 2009：7）。また、校章は、仏教の普遍的なシンボルである「法輪」が西欧の平和のシンボルであるオリーブの枝に支えられるモチーフになっており、これらが相まって東西をつなぐ平和の誓いを象徴している（PBA 2024：1）。そして、スクール・カラーのインディゴは「命のギフト」、ティールは「仏教の教えに対するコミットメント」、金は「阿弥陀仏の智恵と慈悲」を表している。また、校内のホールには阿弥陀仏が安置されている。これらの人工物は、PBAの教育理念である平和と仏教を象徴していることがわかる。

他にも、PBAに特徴的な平和教育カリキュラム、仏教や平和に関連した学校行事や活動（花まつり、菩提日、ハワイ平和の日等）があげられる。また、進路についての親身な個別指導や実践を重視する学習方法等も行動パターンとして、人工物に含めて考えられる。

3.2 信条・価値観のレベル

PBAの信条・価値観レベルの文化は、「ビジョン、ミッション、フィロソフィー」から読み取れる（PBA 2009：ix）。「教育のビジョン」として「生徒のリーダーシップ、知性、平和への奉仕の精神を育むこと」が示されており、「学校のミッション」としては「卓越した学習をとおして大学進学準備をおこなうこと、仏教的価値によって生活を豊かにすること、平和を育む勇気を培うこと」が提示されている。仏教的価値とそれに根ざした平和主義はPBAに固有の文化であるといえるだろう。この平和主義の核となる「平和のフィロソフィー」として、大乘仏教の教えである「六波羅蜜—布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧—」が示されている。そして、「ゴールデン・チェイン・オブ・ラブ」も礼拝等に取り入れられている³。また、PBAでは、浄土真宗の人間観に基づいたヒエラルキーのない本質的な平等や一体感に価値が置かれている（PBA 2016：97）。

3.3 前提認識のレベル

PBAの信条・価値観は平和主義と仏教的価値に集約されるが、その根底には仏教の前提認識が反映されている。存在の本質についての「3つの理解に関するステートメント—諸行無常、因果応報、相互依存—」が、PBAの教育コミュニティの源泉となる世界観として示されている（PBA 2024：4）⁴。また、浄土真宗の教えの前提認識となっている、全ての人間が「凡夫」であるという人間観も示されている（PBA 2016：97）。

3.4 PBAの「平和教育」にみられるハワイ本願寺の学校組織文化の変容

「仏教と民主主義の原理の間に調和を見いだしたパイオニアである今村は、仏教の平和の教えが教育によってアメリカに伝えられるべきであるという信念をもっていた」⁵。シャインが組織文化の創造における組織の創始者の影響の大きさを指摘している（Schein 2010=2017：251）ように、ハワイ本願寺の基盤を確立した今村の教育は、基本的に、PBAに継承されているといえるだろう（本多2022：243-253）。両者の「仏教的平和主義」を考察すると、前提認識のレベルでは、今村が仏教の根本信条としている「平等主義」と「無常主義」（今村1937：199-203）、「四海

同胞」(今村1918:13)は、PBAに継承されている。

他方で、信条・価値観レベルでは、変容が見られる。今村の教育ビジョンであった「佛教の主義、精神、信念の下に独立自尊の人格を確立し民族性の特徴を発揮する善良優秀なる日系市民」(今村1931:7)の育成は、PBAでは「日系人の枠を越えて仏教的平和主義をリーダーとして実践するグローバル市民」の育成になっている(本多2022:243-253)。今村において「独立自尊の精神」は安易にアメリカ化するのではなく、日系仏教徒として自己の尊厳を保つことを意味していたのに対し、PBAでは自己の信念をもって仏教的平和に邁進する「リーダーシップ」へと変容したといえよう。今日、グローバリゼーションが進んで生徒の海外交流の機会も増え、世界情勢の変化に対応する知識、理解が必要になっており、「平和への道」として「グローバル・フレンドシップ」の重要性が指摘されている(PBA 2009:304-305)。また、道徳的価値については、戦前はアメリカ社会に適合的な日本的修身徳目に取り上げられていたのに対して、PBAでは大乘仏教の六波羅蜜が基盤となっている。

人工物のレベルでも、PBAがホスト社会の正規的教育組織となったことで、戦前のエスニックな教育組織との大きな違いがみられる。戦前は、仏教を信仰する優良な「日系市民」の育成を目的として日本的な価値や文化が教科書で取り上げられていたのに対して、PBAの教育カリキュラムには「日系」のエスニック色はほとんどない。PBAのカリキュラムでは、仏教の普遍的価値を基盤とした平和を自己の内面からコミュニティ、世界へと育むことのできる「グローバル市民」を育成するための実践が多く取り入れられている。

3.5 PBAの教育カリキュラム

PBAに特徴的なカリキュラムは、「平和教育」、「仏教教育」、「日本語教育」である。

PBAの「平和教育」の特色は、「平和」を単なる知識として学習するのではなく、様々な学習分野を横断して、各々の教科の学習プログラムに平和について考えたり、実践したりする課題が組み込まれていることである。学校外のコミュニティにおいても、生徒が平和主義の精神を実践し、学びを深めることが重視されている。

PBAで毎年通常の教科プログラムとして履修されている課目においても、教科の担当教員の視点から平和教育の要素が組み込まれている(PBA 2023:36-37)。例えば、「日本語」の授業では六波羅蜜が取り上げられている。「同調と逸脱」の授業には「人間は不平等なことに対しても同調する傾向があることを学び、個人がこの行動基準を改めること」を学ぶ内容が含まれている。また、「不平等の経済的起源」の授業では、南北問題やハワイにおける経済的格差と社会的不平等についての考察もおこなわれている。

PBAの「仏教教育」では、以下の三つの点に重点が置かれている(PBA 2009:285)。第一に、全学年をととして、週一回の仏教の授業(Buddhist living class)があり、教師から直接仏教を学ぶこと。第二に、毎週金曜日に礼拝があり、讃仏歌を歌い、お経を唱え、法話を聞くこと。第三に、カリキュラムを横断して仏教教育の要素が組み込まれていることである。

また、授業では浄土真宗の教えというより世界宗教としての仏教の学びが中心となっている。一年次には仏教の基本、二年次には仏教の歴史、三年次には宗派としての浄土真宗、四年次には仏教の倫理と生活や人生についての考察といった四年間のプログラムが用いられている(PBA 2009:285-287)。この仏教プログラムにおいては、「信仰システムの相互関連性」、「教えと生徒の生活との関連性」、「謝恩の体験と実行」が重視されている。

「信仰システムの相互関連性」の学習では、ハワイが「エスニシティや宗教において多元主義的」な社会であることから、仏教と他の宗教との関連性を認識する必要性が説かれている。例えば、「六波羅蜜」の教えは他の主要な世界宗教と整合性があるとされ、価値の基盤として示されている。また、宗教的多元主義が強調されており、それを学ぶひとつの方法として、仏教とキリスト教の教義の比較が行われている。

「教義と生徒の生活との関連性」の学習では、授業を楽しいものにして、生徒と仏教の関わりを深めるように工夫されている。そして、個人の生き方や信念体系と仏教との関係性について学び、授業で話し合った教えの要素を体験し、実行する機会を設けている。例えば、比較仏教の授業では曼荼羅を作成している。また、奉仕活動の学習プロジェクトをとおして、仏教的価値である「布施」の理解を深める機会が設けられている。

「謝恩の体験と実行」については、全ての「仏教」の授業に組み込まれている。「謝恩」が重要な教えであることを重視し、それを感情的知性のスキルとして捉え、体験する機会を計画的に提供している。そして、このような「謝恩」の体験が仏教的な相互依存の本質についての洞察力を養うことが説かれている。

「日本語」の授業は3年間の必修科目であるが、日本語を用いた「世界言語」プログラムとして位置づけられている(PBA 2009: 283-234)。この世界言語としての日本語の授業において、普遍的な仏教的価値が取り上げられることはあるが、日本文化を学び、楽しむといったエスニック教育としての意図はみられず、語学としてのスキルが重視されている。

4. PBAの組織としての適応と学校組織文化

4.1 「誘因≧貢献」型の適応

PBAは、一つの教育組織として、ホスト社会の教育市場で他校と競合して、生徒を獲得することが必要な状況にある。数ある高等学校のなかで、PBAのもつ魅力が潜在的生徒や保護者に入学を動機づけ、学校コミュニティへの参加を促すに足るものでなければならない。

学校組織は、生徒・保護者が学校の「誘因」である「教育の環境やサービス」等を選択し、「学費の納入、学校活動への参加、寄付」等によって学校に「貢献」することで成立する。そして、生徒・保護者が学校へ貢献している以上の誘因を提供されていると感じている状態である「誘因≧貢献」の関係が持続することで、存続、発展する⁶。

PBAの「誘因」は、PBAがおこなった調査の結果や生徒・保護者の学校との関わり方から読み取れる。生徒の保護者への調査によると、PBAを選択した理由は、回答者46人中、小規模な学校での安全な環境(37人)、少人数のクラス(33人)、大学進学準備体制(30人)、仏教重視(19人)、平和重視(18人)、比較的安い授業料(19人)、立地の良さ(21人)となっている(PBA 2009:174)。そして、同調査において、入学後の教育は、以下のように好意的に評価されている。男女が平等に成功の機会が与えられている(強い肯定と肯定を含めて、44人、以下同)、各々の生徒が学校でよく知られている(43人)、学校が面倒見がよいコミュニティ環境である(44人)(PBA 2009: 188)、カウンセリング/ガイダンスやサービスがよい(37人)、大学カウンセリングがよい(37人)であった(PBA 2009: 195)。また、「貢献」としては、保護者による寄付、生徒の活動のサポート、学校活動のボランティア等があげられる(PBA 2009: 202-203)。

これらの結果から、PBAの主な「誘因」は、小規模の教育体制とそこから生じる生徒と教師の緊密なネットワークであるといえるだろう。そして、PBAの退学者が少ないことから(PB

A 2016：92)、入学後のPBAの学校教育が学校選択時の期待に概ね応えるものであり、「誘因≧貢献」が維持されていると考えられる。このような「誘因≧貢献」の関係性が継続することで、学校へのアイデンティティが形成され、学校ネットワークがアルムナイにまで広がると考えられる。

4.2 「社会関係資本」型の適応

学校は共通の価値観を学ぶ共同生活の場であり、社会関係資本⁷が醸成されやすく、教育は社会関係資本の醸成に大きく関わりとされている(稲葉2007：101-105)。これに加えて、PBAの学校組織文化の長所として示されている仏教的な平等に基づく一体感は、シャインのいう「内的統合」につながるものであり、社会関係資本が醸成されやすい要素であると考えられる。PBAの学校コミュニティでは、「誘因≧貢献」の関係性が維持されることで、ネットワークが構築され、規範(特に互酬性の規範)が共有され、信頼が育まれることにつながり、結束型社会関係資本が醸成されてきたと考えられる。寺院コミュニティとのネットワークも創設以来保持され、結束型社会関係資本が維持されてきた。さらに、そのネットワークはボランティア活動等をおして学校外のコミュニティにまで広がり、橋渡し型の社会関係資本の醸成もみられる。これらの社会関係資本は活用されることで、教育効果をもたらす(稲葉2007：101-105)、一方で、組織としての発展にもつながる重要な機能を担っている(本多 2022)。PBAは募金活動に強い(PBA 2023：94)とされているが、その社会関係資本が活用されているからであると思われる。

4.2.1 学校コミュニティ

PBAでは小規模の教育体制で「学校一生徒」間の緊密なコミュニケーションのネットワークが構築されており、「学校一生徒」の結束型社会関係資本が醸成されていると考えられる。PBAはこのようなネットワークを保護者にも広げるように尽力してきた。2006年から2007年にかけて、主要な学校行事への親のサポートを体系化するため、Parent Student Stuff Organization (PSSO) が組織された(PBA 230-232)。その年、PSSOはFinding Our Way fundraising banquet、キング牧師記念日のワイキキ・パレード、アルバート・ミヤサト・メモリアル・ゴルフトーナメント、PBA初の卒業式に多数の親の参加を募ることに焦点を当てて活動した(PBA 2009：230)。さらに、この組織は、週間のe-ニュースレターの配信、沖縄フェスティバルのためのリサイクル等の募金活動、キング牧師記念日の行事の計画、PBAの学校調査への協力等をおこなっている(PBA 2009：230-232)。また、学校の放課後学習の機会を提供する等、ボランティア活動への保護者の参加もみられる(PBA 2009：202-203)。このように、「学校一保護者」の結束型社会関係資本が醸成され、活用されていることがわかる。

PBAはアルムナイへも学校ネットワークを広げるために、アルムナイやその親の組織を立ち上げている。そして、関心をもたれるようにアルムナイの話題を取り上げてe-ニュースレター等で発信している(PBA 2023：65)。また、PBAは、アルムナイのためのピクニック(PBA 2016：92-93)、仏教センターでの交流活動、必要に応じたパストラルケア等を実施している(PBA 2009：240)。さらに、在校生の家族も参加するボーリング大会、アート・フェスティバル等の学校行事にもアルムナイの参加の機会を設けている(PBA 2009：240；2023：94)。しかし、アルムナイやその家族の寄付は、在校生の親、祖父母等に比べて少ない(PBA 2023：65-66)⁸。2020年から2021年にかけてアルムナイやその親の募金活動への参加は増加してきているが、さらに改善の余地が

あるとされている（PBA 2016：92-93；2023：65）。

PBAがアルumniとの関係性を維持する理由として、その教育プログラムの長期的な効果について理解を深めることもあるが、心血注いで教育した生徒が精神的に不安定な青年期を乗り切るための継続的なサポートを続けることがあげられている（PBA 2016：92-93）。このように、学校、生徒・保護者や祖父母、アルumniやその家族のネットワークがつながって、学校コミュニティが形成され、社会関係資本が醸成されてきているといえるだろう。

4.2.2 寺院コミュニティ

PBAは浄土真宗本願寺派の本山、ハワイ本願寺教団やハワイ本願寺別院との関係を軸として、附属中学校（Hongwanji Mission School、以下HMSと記す）、ローカル寺院ともつながりを持ち、寺院コミュニティを形成している。例えば、PBAの創設にあたっては、本山が150万ドルの資金提供をおこなっている（PBA 2009：iii）。創設後も、ハワイ本願寺教団は、17万5千ドルの年次補助金を提供している（PBA 2016：171）。ハワイ本願寺別院は、ハワイ本願寺教団とともにPBAの評議員を務め、仏教学習や行事をとおしてPBAとつながっている（PBA 2009：241）。PBAは、HMSのプールを使用し、一方でPBAがカーボート・レースや幾何学の授業のプロジェクトにHMSを招待したりしている。また、PBAはHMSの卒業生の進学先にもなっている⁹。さらに、PBAの生徒はハワイ本願寺の準仏教青年会（Jr. Young Buddhist Association）ともつながりを持ち、ハワイ州議会への働きかけに加わり、その活動が「ハワイ平和の日」の制定に至っている¹⁰。このように、結束型社会関係資本が醸成されている。

PBAは、ローカル寺院のメンバーとのネットワークの構築にも努めている。これらの寺院のメンバーが関心のありそうな話題をハワイ本願寺が発行している「護持」に、毎月寄稿している。また、PBAの生徒は、寺院の行事（お盆、浄土真宗開教750年記念の式典の準備等）（PBA 2016：93）に加わっている。さらに、定期的にローカル寺院の礼拝に参加したり（PBA 2009：242）、太鼓パフォーマンスをおこなったりしている¹¹。これらの試みが功を奏し、寺院メンバーが継続的な経済的サポートをするケースもみられるようになった（PBA 2009：242-243）。PBAは、こうしたサポートやコミットメントに応え（PBA 2009：243）、相互関係を持続することで寺院コミュニティのネットワークを確立してきた。このように、ローカル寺院との橋渡し型の社会関係資本が醸成されてきたと考えられる。

4.2.3 学校外のコミュニティ

PBAはそのネットワークを近隣地域や一般のコミュニティにも広げる試みをおこなっている（PBA 2023：93-94）。例えば、一般に向けて、新聞、プレスリリース、ウェブ等で学校のミッションについて発信している。また、近隣のチャーター・スクール、School for Examining Essential Questions of Sustainability とともに強固な関係を維持している¹²。

PBAの生徒も平和教育のカリキュラムや活動をとおして、校外のコミュニティとのネットワークを構築している。このような活動のなかでも、年中行事となっているLighting Our Way Banquet と太鼓フェスティバルは学校サポーターのネットワークを拡大し、募金にも貢献している。Lighting Our Way Banquet では、4年生が多様な分野（教育、ビジネス等）で平和を推進しているリーダーにインタビューし、伝記を作成して発表しており、市役所職員等多数出席している。さらに、PBAの太鼓グループが近隣の老人ホームや団体で演奏したことが寄付に

つながる等、学校外でもネットワークが構築されている (PBA: 2009: 242)。

また、平和教育プログラムの授業や個人研究を契機としても、学校外でのネットワークが広がっている (PBA 2009: 244-46)。社会科の授業ではハワイ大学のSpark Matsunaga Institute for Peace や East-West Centerが主催するグローバルなイベントや文化に関連する講義、行事に参加し、ネットワークを築いている。また、4年次の授業では毎週金曜日、「謝恩」の実践としてホームレスに食事を提供する活動をおこなっている。生徒が運営するガバナンス・カウンシル (平和クラブ) の活動では、2007年にオアフ島の他校の平和クラブと交流し、2010年に平和サミットを企画している。2008年には、生徒が青年ホームレスの問題に関心を持ち、Youth Outreach Center of Waikikiのために募金活動をおこない、1,000ドルを寄付している。また、4年次の生徒がDomestic Violence Action Centerのインターシップに参加したことを契機とし、Hawaii State Task Force to End Sexual Violenceも含む州公認の組織にもネットワークを広げている。これらの活動が橋渡し型の社会関係資本の醸成につながると思われる。

5. おわりに

PBAの学校組織文化には、ハワイ本願寺の教育の基盤を築いた今村恵猛の提唱した仏教的平和主義が反映されていると思われる。その文化は、今村の教育の根底にある世界観、人間観を前提認識とし、仏教的信条・価値観に根ざした平和主義を基盤とした教育カリキュラムを基軸としているといえよう。しかし、ホスト社会の正規的教育組織となったことで、その学校組織文化が変容した側面も大きい。PBAでは多様な民族的、文化的バックグラウンドの生徒が学んでおり、戦前のような日系人を対象としたエスニック教育はおこなわれていない。PBAがおこなっているのは、普遍性をもった仏教的平和教育である。

PBAの学校組織文化は、組織が存続、発展するための「誘因」となり、社会関係資本を醸成する要素—規範、信頼、ネットワーク—の土壌として機能している。PBAを進学先として選択する主な「誘因」となっているのは、小規模で安心な学習環境での個人に寄り添った教育体制であり、個性を尊重する仏教的平和主義の価値観・信条を反映しているといえよう。このような「誘因」としての学校組織文化によって、学校と生徒・保護者の「誘因 $\geq$ 貢献」関係が維持されることで、PBAは組織として成立、存続している。さらに、重要な点は、この関係性が学校—生徒・保護者のネットワークの構築につながり、学校コミュニティ内で結束型社会関係資本が醸成されてきたことである。PBAの仏教的一体感、「謝恩」を重視する文化的土壌は互酬性の規範を共有し、信頼を育みやすいものであるといえよう。その学校ネットワークはアルムナイやその家族にも広がり、橋渡し型の社会関係資本が醸成されてきていると思われる。

PBAは、ハワイ本願寺の附属教育機関であり、仏教的価値・規範を共有する寺院コミュニティのネットワークも構築している。PBAに対して、ハワイ本願寺教団は経済的なサポートをおこなっており、一方でハワイ本願寺別院は仏教教育や行事に参加する機会を提供する等、結束型社会関係資本が醸成されている。さらに、ローカル寺院の門徒とも、行事や交流の機会をとおしてネットワークが構築され、橋渡し型社会関係資本が醸成されていると思われる。

これらのネットワークに加えて、PBAの生徒は平和教育プログラム等をとおして、学校外のコミュニティの人々と交流し、ネットワークを構築している。このようなネットワークによって醸成される橋渡し型の社会関係資本は、PBAが組織運営上抱えている大きな問題—小規模であることによる知名度の低さ—を克服し、教育市場で生徒を獲得することにもつながるであろう。